

# 「できますゼッケン」を用いた避難所運営イメージトレーニング A report of disaster drills focusing on shelter activities for vigorous groups after 3.11

○市古太郎<sup>1</sup>, 田嶋麻美<sup>2</sup>, 塩谷貴教<sup>2</sup>

Taro ICHIKO<sup>1</sup>, Asami TAJIMA<sup>2</sup> and Takanori ENYA<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 首都大学東京 都市システム科学域 Division of Architecture and Urban Studies, Tokyo Metropolitan University

<sup>2</sup> 株式会社 地域計画連合 Regional Planning International Co., Ltd.

This paper reported disaster drills focusing on shelter activities adopting a piece of capacity plate. Two case studies were reported; a citizen group of young lifelong learning and high school. They were both more vigorous for disaster prevention than before the East Japan Earthquake.

A piece of capacity plate make a important role in disaster drills. And we discussed advantage to adopting it.

**Keywords:** Voluntary disaster prevention organizations, disaster drills, shelter activities, learning methods

## 1. 新たな防災訓練ニーズに応えられているか？

東日本大震災を契機として、これまで必ずしも相対的にみて震災への取り組みが活発でなかった集団や組織でも、ボトムアップ、トップダウン両面から震災への取り組みが広がっている。そういった震災への取り組みニーズに応える方法論を、これまでの実践的および学術的蓄積を踏まえつつ、新しく開発していく余地がある。災害から学ぶということは、それぞれの集団や組織において、自助・共助・公助をどう組み立てておくか、という方法論を構築していくことも意味しよう。

本稿では、東日本大震災後に震災への活動に取り組んだ市民グループとトップダウン型で宿泊防災訓練が実施されることになった都立高校を事例に、「できますゼッケン」を用いた避難所運営イメージトレーニングを試行したので報告したい。

## 2. できますゼッケンとは<sup>1)</sup>

本稿で用いた「できますゼッケン」とは神戸市デザイン都市推進室が製作したツールで、図1に示すように災害避難所において「ボランティアの力を最大限活用し、被災者同士の助け合い行動を生むために『自分ができること』の宣言を促すツール」である。これまでのところ、防災訓練において本格的に活用されたことはなく、防災訓練ツールとしての効果も未知数であった。使い方はシンプルで、①医療・介護、②ことば、③専門技能、④生活支援の4分野(4色)のゼッケンに名前と自分のできることを記入し身につけるものである。

## 3. 事例Ⅰ：東京にしがわ大学減災 WS

「東京にしがわ大学」は「多摩地域をフィールドに、街をキャンパスに見立て、誰もが参加できるユニークな学びの場を通じて、興味でつながる新しいコミュニティを支援し、自分らしく過ごせる時間を大切にするネットワーク」であるという。2009年8月に設立され、2010年は10回、2011年は29回、2012年は34回の多様な分野の授業が実施されている。

防災に関する授業は、2011年4月の「ワールドカフェ：

コミュニティについて考える～なぜ災害時には互いに助け合う共同体が立ち上がるのか～」および本稿の事例である2012年3月の「東京にしがわ減災ワークショップ～あれから1年。ゆるやかにつながる地域コミュニティにできること～」の2回である。事務局との数回の相談を経て、表1のようなプログラムを実施した。

## 4. 事例Ⅱ：都立永山高校での宿泊訓練時のWS

東日本大震災当日、都立高校では宿泊した生徒が少なくなかったこと、幹線道路沿いの都立高校で「帰宅支援ステーション」が開設されたこと等を踏まえ、2012年度より全ての都立高校で宿泊防災訓練に取り組むことになった<sup>2)</sup>。校舎内からの避難訓練は毎年実施していたものの、宿泊防災訓練の内容を充実させるために、各都立高校は消防署や自衛隊といった外部組織や専門家の力を借りながら、生徒の災害対応力向上を図る取り組みをおこなっている。

そういった都立高校と外部組織との連携の一事例として、筆者らの首都大チームは、多摩市にある都立永山高校にて宿泊訓練を合わせて全3回の防災授業を2012年度に実施した。1回目は災害現象に関する講義、2回目は災害対応力に関するグループワークを経て、3回目の防災授業として表1に示すプログラムを、非常食による夕食後の時間帯で実施した。



図1 できますゼッケンの概要 (HPより<sup>1)</sup>)

表1 「できますゼッケン」避難所WSの実施概要

	にしがわ大学 減災ワークショップ	都立永山高校宿泊訓練時の避難所ワークショップ
実施日時	2012年3月10日 14時～16時半(150分)	2012年10月10日 19時～20時(60分)
参加者 主な属性	一般市民26名 NPOのWebとメールで募集 1グループ7人程度で構成.	1学年生徒約100名 (学年全生徒のうち承諾した生徒) 1グループ10人程度で構成.
WSプログラム	<b>Step1:</b> 全体ガイダンス 【10分】 <b>Step2:</b> できますゼッケンと311ふり返りシート記入 【10分】 <b>Step3:</b> 講師プレゼン：共助のデザインを考える 【15分】 <b>Step4:</b> できますゼッケンで自己紹介 【20分】 ・1人1分で自己紹介も兼ねて会場全体で発表. <b>Step5:</b> GW1：3.11をふり返る 【30分】 ①自助の行動、②巨大地震に対して不安に思うこと、 ③被災地への行動 <b>Step6:</b> GW2：活動する市民がつくり出す新しい防災 【30分】 力の可能性 A班：ぼうさいカフェ：地域における減災に向けたアイディアを集めよう。 B班：ボランティア本舗：東日本の津波被災地に対して、何が必要か、何ができるか。 C班：つながり問屋：ゆるやかなつながりを促進するためのアイディアを集めよう。 <b>Step7:</b> 全体発表 【30分】	<b>Step1:</b> あいさつ等 【05分】 <b>Step2:</b> 前回の振り返りと全体ガイダンス 【20分】 1) 第2回防災学習のふりかえり・各班2分づつ。 2) 避難所のイメージ(映像)と進め方の説明 <b>Step3:</b> グループワーク 【30分】 1) できますゼッケンを各自で記入 2) グループ内(クラスごと)アイディア共有 3) ファシからコメントと発表準備 <b>Step4:</b> クラス毎に壇上で写真撮影 【20分】 <b>Step5:</b> クロージング 【10分】 ・首都大スタッフから一言づつコメント
ゼッケン記載 内容 主なもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サッカーのコーチ</li> <li>・英語</li> <li>・ボランティアコーディネート</li> <li>・お話聴きます</li> <li>・ミーティングまとめ役</li> <li>・荷物運搬</li> <li>・イラスト</li> <li>・高齢者介護</li> <li>・力仕事</li> <li>・裁縫</li> <li>・ストレッチ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トイレ掃除◎</li> <li>・洗濯◎</li> <li>・子どもの世話◎</li> <li>・マッサージ○</li> <li>・応急処置、手当て○</li> <li>・力仕事○</li> <li>・ダンス○</li> <li>・料理</li> <li>・フィリピン語、中国語</li> <li>・大工仕事</li> <li>・歌をうたう</li> <li>・話し相手になります</li> <li>・裁縫</li> </ul>



図2 にしがわ大減災WSでのゼッケン利用の様子



図3 都立永山高校宿泊防災訓練でのゼッケン利用の様子

## 5. 比較考察

### (1) プログラム比較

にしがわ大では150分WSの自己紹介パートとして実施された。「自分たちにできること」を考えていくWSにおいて、その導入にかかる「予習」になった。一方の永山高校では、60分WSのメインとして活用された。生徒達は大学メンバーからの助言や生徒同士の会話を通してゼッケンを作成していった。

### (2) 参加者の様子

参加者の実践の様子は対照的であった。にしがわ大WSは社会人メンバーであり、当初、自分のスキルを書き込もうという参加者が多かったが、「自分の仕事が本当に避難所で役に立つのだろうか」という問いにつながり、そこから東日本大震災での避難所の様子を想像しゼッケン記入に進んでいた。つまりゼッケン作成を通して、災害想像力を作動させるワークにつながっていた。

永山高校では初動反応はにぶいグループもあった。しかし「自分は将来看護師になりたい、ボランティアでケガの手当の経験もある。避難所でも手当ができると思う」また「自分は大工になる。大工仕事で役に立てそう」といった将来の仕事モデルが明確な生徒が口火を切り、大

学進学後の仕事像が明確でない生徒の顔つきも変わってきた。そして「自分は明確にできることはないけれど、トイレ掃除はしっかりやりたい」といった発表がなされた。ゼッケンづくりを通して、自分が社会にどう貢献するのか、考えることにつながったと言えるだろう。

## 6. 結論と今後の課題

本稿は災害避難所現場での活用を想定して作成された「できますゼッケン」を事前防災の場で活用した事例を報告し考察した。どちらの事例でも、避難所生活を想像し、自分にできることを考えてみることで、およびWSの雰囲気づくりという点で効果的であった。特に永山高校の事例では、災害時にできることを考えることは、高校生として日々つきつけられる「将来どんな仕事をするか、仕事を通してどう社会に貢献するか」という問いにつながってくる点は興味深い知見と思われる。

### 参考文献

- 1) デザイン都市・神戸推進会議「できますゼッケン」、<http://issueplusdesign.jp/dekimasu/>
- 2) 東京都教育庁指導部「全ての都立高等学校等で実施する一泊二日の宿泊防災訓練について」,2012年4月